

A-Lab Artist Talk

出演	稲本紗希、ザラ・ヘントリジアク、助石一枝、中川亮二、三枝愛、村田眞子
司会	おかけんた (アートプランナー)
日時	平成 30 年 6 月 2 日 (土) 午後 2 時~午後 4 時
場所	あまらぶアートラボ A-Lab room1

シティープロモーション事業担当 松長 (以下 松長)

「A-Lab Artist Gate」は、この春に大学を卒業、大学院を修了したばかりの若手アーティストによるグループ展で、3度目の開催となります。今回は、卒業したての人だけでなく、今年度から始まった、尼崎市の姉妹都市、ドイツのアウクスブルク市との若手アーティスト相互派遣プログラムの一環として、ザラ・ヘントリジアクさんが参加されています。司会は、芸人でアートプランナーでもあるおかけんたさんです。

作品や大学について

おかけんた (以下 おか) アーティストトークというと、基本的にはこの作品がどういうものか、という話で終わるものです。でも、みなさん疑問に思っていることがあると思うんです。美術大学、芸術大学って一体どんなところなのか。そして、そこに通う学生たちがどうやってアーティストになっていくのか。そんなことも含めて話を聞いていきたいと思います。

稲本紗希 (以下 稲本) はじめまして。私の作品は通路に展示してある毛糸の作品です。それぞれの

作品の下に、編んでいた時にしていたことや、考えていたことを書いています。生きていて、日々過ごしている中で覚えていることは、ほんの一握りしかないと思っていて、忘れてしまった時間は、時間なので目に見えないからそのままなかったことになる。だから毛糸と共に編み込むことで、目に見えるかたちとして残そうと思い作りました。

おか 編まれた毛糸の下には、どこどこからどこどこまで移動しました、とか書かれている。時計だったら1時間とかの数値になるところを、毛糸で表しているわけです。日常の時間を作品にしているって、実際に出来上がったときにどう感じましたか。

稲本 展示しているのはごく一部で、展示できなかったものを合わせると1ヶ月ちょっとで100個以上は編めていて、そう思うと、何かをしていて印象に残っている時間以外がこんなにもあるんだな、と感じました。

おか 今はよく移動中にスマホを使ったりしているけど、その時間を毛糸で紡いだということですね。ものによって色が違いますが、それは何か理由があるのですか？



おかけんたさん



稲本紗希さん



アーティストトークの様子

稲本 あらかじめ毛糸を大量に購入して、その時に編みたいと思った色を直感で選んで使っています。

おか 意図的なものではないということですね。自分に引きつけて作品を見てみると、ああ、自分もこんなに無駄な時間を過ごしているんだなあ、と考えたり。ある種ダイアリーのようなもので、時間を毛糸で表現しているのがおもしろいなと思いました。

稲本 卒業制作展では、個展のように部屋を貸しきって展示しましたが、通路という人が通り抜ける場所での展示ははじめてなので、違う見せ方ができたのではないかと思います。

おか 何気なく過ごした時間を作品化し、プライベートな部分をさらけ出している。今流行っているインスタグラムと共通した部分を感じます。一見アナログのようでいて、実はデジタルにも対応している作品だなと思いました。稲本さんの学生時代はどのようなものでしたか。

稲本 私は京都造形芸術大学を卒業して、そのま

ま大学院に進学していますので、今も学生です。山の上にある大学ですが、芸術大学のなかでは都会にある方ではないかと思います。今年は大学院生が80人いますが、日本人は30人ほどしかいません。私と同室は台湾の人とオーストリアの人です。全体としては、アジア圏の人が多くですね。私は様々なところで制作するという作風なので、ずっと学校にいるという感じではないです。

おか 次に、ザラさんお願いします。

ザラ・ヘントリジアク (以下 ザラ) 写真は13歳頃に始めました。学生時代にセルフポートレートを研究したいと思うようになり、物や人物も撮っていますが、自分を撮ることが中心になっています。今回の展示のテーマは、コミュニケーションです。多くの写真を並べていますが、すべて「コミュニケーションをとっている」ということで成り立っています。それぞれ2枚の写真がコミュニケーションをとっているという形になっています。

おか 自分以外を撮るとき、被写体となる人たちにコンセプトを説明しているのですか？



ザラ・ヘントリジアクさん

ザラ 自身を撮影する時は感情で撮ることができ
ますが、他の人を撮影する場合は事前にコンセプ
トを説明し、表情などを指示しています。

おか コンセプトのコミュニケーションとは、対に
なっている写真同士のコミュニケーションというこ
とですか？

ザラ 写真の被写体同士がコミュニケーションを
とっているということもありますが、写真とともに
(私が観客と) コミュニケーションをとる、という
ことも考えています。

おか 1枚1枚の写真にそれぞれ世界観があるが、
それが2枚あることによって違うコミュニケーショ
ンが生まれている。そしてさらに、その作品と対
話する観客、という新たなコミュニケーションが
起こる。非常に興味深いのは、写真に写るザラさ
んはどれも厳しい表情をされている。

ザラ お誉めの言葉ととらせていただきます。

おか 学生時代のことをお話しください。

ザラ 私のいたところは芸術大学ではなく、日本
というカレッジ(単科大学)に近いところで、14
~18歳くらいの若者が通っていました。もちろん、
もっと年齢が上の人も通うこともできます。専攻は
モードと写真のふたつで、私は2年間、写真を学
びました。

おか 卒業して2年経つということですが、ザラ
さんの同級生の方々はアーティストとしてお仕事さ

れているのですか？

ザラ 芸術家になるための学校ではなかったの
で、アーティストではなくカメラマンとして本や広
告の仕事をしている人が多いです。

おか 学校の自慢できるところは何ですか。

ザラ テクニックに長けているところですよ。とて
もいいカメラが揃ってましたし、暗室も整ってい
てアナログ写真を学ぶことができました。1930
年代のカメラもたくさんありました。薬品を使っ
てガラス板に像を焼き付けたこともあります。動
画の撮り方も学びました。学校には、早い時で朝
の8時から、だいたい夕方5時くらいまでいま
した。夜遅くまで残らないのは、写真は太陽の光
がないと撮影できないためです。

おか 次に助石さんです。木の年輪を描いた作品
がありますが、どうして年輪なんですか。模様か
面白いからですか。

助石一枝(以下 助石) 積み重なっているとい
うことを表現したかったからです。もともと、木が好
きだったということもあります。他にも、積み重
なることでできていることを表そうと、自分の爪
をモチーフに作品を作りました。

おか 今までいろいろ版画の展示を見てきまし
たが、爪の作品を見たのは初めてです。爪を銅版画
にしたことで何か発見はありましたか。

助石 実は、この作品には嘘をついているところ



助石一枝さん



《爪》(部分)

があって、健康な人にあるといわれる爪の下の白い部分(半月)が、私には全くないんです。作品では、爪しさを出すために白い部分をわざわざつくりました。

おか では、大学の話を聞きたいと思います。

助石 大学では版画コースに在籍していたのですが、写真、木版画、銅版画、シルクスクリーン、リトグラフに分かれていて、それぞれ自分の所属する工房で制作しています。細かい作業が好きなので銅版画を選びましたが、それぞれの技法に合う性格や特質があります。私のやっている銅版画は我慢強い、シルクスクリーンはおしゃれさん、木版画は「和」とか。私の通っていた京都精華大学をひとことと言うと、「動物がいるところ」です。鹿や孔雀がいます。ただ、動くものの絵を描くのが苦手なので、自分の制作には特に影響していません。

おか だからじっくり、ゆっくり成長していくものを選んで制作されているのですね。では、中川さんに伺っていきます。どういった作品でしょうか。

中川亮二(以下 中川) 石の周りを電球が回っているという作品です。石をずっと眺め続けていると、石は全く動かないのですが影が動いていきます。その時に一日の時間というものに気づかされ、そこからインスピレーションを受けて作りました。石には幼い頃から興味があり、集めたりしていま

した。

おか 石の周りを回っている電球は、15分に1回止まります。その意味は何ですか。

中川 回っている時はずっと音がしているのですが、試行錯誤しているなかで止めてみたら、影の動きと電球の動きが止まって、光が天からやってきて、、、その止まる感じが良くて。

おか 石の周りをぐるぐる回っていた影や音が止まることで、石と影と光がひとつになって、時間とか全てを超越するような静寂が訪れる。私はそう感じました。

中川 植物の成長を記録した映像とかで、よく繰り返ししているのを見ます。それと同じで、石に蓄積されたすごい長い時間を、電球を早く回すことで感じてもらいたい。そしてそれが止まることで、石の影も止まる。現実の世界では石の影はほとんど動かない。それと同じ状況になる。現実とフィクションはつながっているんだと感じてもらえれば。

おか どの大学でしたか。

中川 京都市立芸術大学の彫刻専攻です。山の中にあって、アクセスは悪いです。

おか 通学にどれくらいかかっていたのですか。

中川 出身が愛知県なので、歩いて5分くらいのところに部屋を借りていました。そこには帰らず、朝まで制作していることもありましたが、最近は



中川亮二さん

厳しくなって、夜中12時になると追い出されます。
おか なるほど。では、三枝さんよろしくお願ひいたします。

三枝愛 (以下 三枝) 作品は「庭のほつれ」というタイトルで、4年くらい続けています。実家がしいたけ農家をしていて、作品には原木や原木に穴をあけるときにでるおがくずなどを使っています。実家のある埼玉は、関東平野で山がなく、木がないところで、東北から木を運んできて栽培していたのですが、東日本大震災に伴う原発事故の影響で、事故後は長期に渡って原木不足になってしまいました。ひとつの木に菌を植えると3年間はしいたけを生やすので、震災があって2、3年は目立った変化がなかったのですが、だんだんと木が朽ちて殺風景になっていきました。遠くで起こってしまった出来事で、幼い頃から親しんでいた景色が変わった。いつ目の前の景色が変わるかわからない状況になったことで、「庭のほつれ」という作品を作りはじめました。

(作品の一部として使われている古い写真を見ながら) この写真は昔、家に市長が視察に来た時のものです。白いシャツが父で、青っぽいスーツを着ている市長にしいたけ栽培の説明をしているところです。すごく見えにくいんですけど、真ん中で顔を隠しているのが私です。この前日までは、市長の訪問はすごいことで、自分に見えていたこと



〈庭のほつれ〉(部分)

や大切にしていたことが偉い人たちにも伝わると期待していました。でも実際には、来た人たちがいったい何を見ているのかよくわからなかった。立ち会った自分としては、その場にいた証は残したいのだけれど、ここに市長が来たという証拠写真にただ素直に写るのは悔しくて、カメラマンがシャッターを押す瞬間に、持っていた下敷きで顔を隠すということを繰り返していたんです。それがこのような形で残されています。

おか この話を聞いていると、「存在」というものに対して何か自分の中に響くものがあるのかな、と感じました。箱の作品は、その象徴的なもののように思うのですが。

三枝 大学を卒業してから、京都を拠点に活動し始めて、古道具屋さんを見て回っているうちにたくさん箱が集まりました。箱は本来、物に合わせてそれを入れるために作られるわけですが、ある古道具屋のおじさんが、物売る時に箱を探すのが面倒なので空箱が溜まっていくと言っていたので、私がそれを譲り受けて、入れるべき物とはぐれてしまった箱たちのために、箱に合わせて中身を作ったんです。

おか 空白や存在、物質というものに対する考え方が一貫していますね。大学のことを教えてください。

三枝 大学は東京藝術大学なのですが、京都で制作していたので、この2年ぐらいほとんど行っていません。学部を卒業してから、なぜか関西方面での展示が立て続けにあったので、東京で制作して作品を持っていきより、制作は京都のアトリエでして、自分だけが東京に帰るほうが楽だなと思うようになりました。

おか 大学ってそれが許される場所なのですか。

三枝 私のいた研究室は、それで大丈夫でした。むしろ日本にいる学生の方が少ないくらい、みんないるんな場所にいました。ただ、そういった研



三枝愛さん

研究室は珍しい方だと思います。東京藝術大学を一言で説明するのは難しいですね。

おか 僕が思うのは、便利で環境がいい大学。校内のあちこちに作品が設置してあって、テーマパークみたいだと思います。では、村田さんお願いします。

村田眞子（以下 村田） 私の作品は、粘土で作った立体物になります。なにかに縛られていて自由がきかない人たちに魅力を感じていて、そういう人たちの中には計り知れない力があるように思っています。

おか じっくり見ると、可愛いキャラクターがいたり、真ん中のところにはうごめいているようなイメージがあったり。タイトルに「くよくよするなよ、踊れ」とあるので、内面的なものを表現しているのですよね。糸でつながっている部分が遊園地みたいです。

村田 それは盆踊りをイメージしています。他の作品でも女の子が登場するのですが、ちょっと性格が暗いというか、...

おか 応援歌みたいな、そういう人たちに対して元気出そうよ、みたいな感じがありますよね。とてもポジティブな気がします。なぜこのような大きな作品を作ろうと思ったのですか？

村田 お世話になっている作家さんから、大きな作品を作ったほうがいいよ、とアドバイスをいた

だいたいで作りました。

おか 大正解ですね。ミュージカルの舞台セットみたいでもあります。大学について教えてください。

村田 京都精華大学に通っていたのですが、校内に（放し飼いの）鹿が歩いているようなところなんです。陶芸コースの学生は、学園祭の時に作った器を展示したり、販売したりもします。

おか 最後に柏原さんの作品を紹介いたします。

松長 柏原さんはお仕事の都合で来ることができなかったので、代わりに説明します。彼女も京都精華大学の学生で、版画コースの出身です。作品は、46種類ある「富嶽三十六景」を消しゴムはんこで模したものと、その46種類の版を使って作られた青富士です。「No. 47」というタイトルには、46枚作られた「富嶽三十六景」の47枚目の作品という意味合いが込められています。消しゴム専用の彫刻刀を貰ったことをきっかけとして、この作品が生まれたそうです。

おか とても細かい部分まで彫られていて、見事な作品になっていますね。



村田眞子さん

ターニングポイント

おか それぞれのターニングポイントをスケッチブックに書いていただきました。稲本さんのターニングポイントはいったい何だったのでしょうか。

稲本 島袋道浩さんの《浮くもの／沈むもの》です。野菜を水槽に入れて展示するという作品なのですが、それを見たとき「なんて自由なんだろう」と救われた気がしました。作品を作ることについて考え直すきっかけになった作品です。

おか 僕も20年ほど前に、美術館で島袋さんの作品を見ました。その時は、果物で作ったゴリラの顔の真ん中に島袋さんが座っていて、動物園のおやつ時間に合わせてそれらを食べる、というパフォーマンスでした。粋をはみ出していいんだ、自由でいいんだ、というところにターニングポイントを見出したわけですね。続いて、ザラさん。何か絵が描いてありますね。

ザラ 私は皆さんのように芸術家としての教育を受けてきたわけではないので、自分がしていることが正しいかどうかずっと悩んできました。テクニックは学んだのですが、どちらかと言うと芸術の方に興味があり、先生の指導とは反対のことをしていました。でも今はそのことが正しかったと思っています。そしてターニングポイントは、このA-Labです。いままで展覧会をしたことがなかったのですが、ここで作品を披露することができて皆さんに興味を持てただけは、自分にとって大きなチャンスです。ですので、最後にお菓子を食べてきたことができたという絵になっています。

おか 展覧会にはよく行かれたりするのですか。また、見に行くのは写真が多いですか。

ザラ アウクスブルクはミュンヘンに近いので展覧会も数多く開催されていて、よく行きます。写真家ですので、写真の展示が一番多いですが、絵にも興味があって油絵をよく見ます。そのほかには日本の浮世絵、蒔絵にとっても興味があります。今、



日本にいますので、それらを見ることができてうれしいです。

おか ゆっくり見て帰ってください。助石さんのターニングポイントをお願いします。

助石 ターニングポイントは「怖さ」です。ものを作ることは好きですが、見せることは怖いんです。その怖さをなくすにはどうしたらいいのかと考えた時に、できるだけ丁寧にすればいいのかなと思いました。なので丁寧に、時間をかけて点描しています。

おか 丁寧にすることで見せる怖さがなくなったのですね。

助石 いえ、まだ怖いんです。卒業期間中に風邪をひいてしまって、私の作品についての感想を誰からも聞くことがなくて、いいのか悪いのかわからなかった。(その卒展をきっかけにアーティストゲートに) 声を掛けていただけたのは、作品がよかったということなのかなと思ううれしかったです。

おか ゆっくりと、ひとつひとつ成長していく、という要素が、彼女自身にもあるようで面白い。作品とアーティスト自身が同化しているような印象を受けました。僕は、アーティストは作品に勝ってしまっただけだと思っています。アーティスト

よりも作品の方が輝いてほしい。だから、このように作品とアーティストが共に歩んでいることが、すごく面白いと思います。

中川さんは、「骨折」？

中川 大学でラグビー部に所属しているのですが、試合中に右足を骨折してしまいました。10日くらい入院したのですが、骨折しているので体にいつもとは違う強い違和感がある。この違和感をなんとか形に残したいと思いました。その時に、芸術大学では課題が出されるのですが、そういった(与えられた)課題をこなすとかではなく、自分が残したいと思ったものが作品になっていくんだなと気付きました。手術して退院した日に、足はまだ腫れた状態だったのですが型取りをして、石膏に落としこんでから違和感や痛みを刻み込んで、さらにそれを樹脂に置き換えて作品にしました。その2年後に、足に入れていたボルトを取り出す手術をしたのですが、これでやっとこの作品が完結するなと思って、ボルトを加えた形に作り直しました。

おか 2年がかりの作品ということですね。作品の写真を見て、以前、自分が肋骨を骨折したことを思い出しました。そこから作品と鑑賞者の対話が始まる、それがアート鑑賞の楽しいところです。次、三枝さんのターニングポイントはなんですか。

三枝 「共同制作」です。高校の同級生と2人で1年くらい続けました。いままでずっと1人でものを作ってきたのにいきなり2人ですようとすると、どうしても衝突が起こる。私が勝手に作品のプランを思いついてそれを提案しても、相手が作りたいたいという気持ちにならないと形にならない。それが初めはすごくフラストレーションで、でも途中から意識が変わって、待つということをするようになりました。制作の過程の中に、待つという時間ができたんです。共同制作をしたことによって、自分

ひとりでは見れなかったものが見れたと思います。ただそれは年で終わって、ひとりに戻った時に何も作れなくなっていました。作っていいよと言われることを待っている自分がいて、でもその相手はいなくて。だから何も始まらない。そんな時に、庭に落ちていた木が目に入って、「そっか、人とじゃなく、物と一緒に作らばいいんだ」と考えたのが今の制作の始まりです。

おか 物との共同制作ということですね。最後に村田さんの「部屋」。

村田 大学院1年生の時に個展をしたのですが、作品を見られるのがすごく恥ずかしくて、できるだけ控室から出ないようにしていました。なんで個展なんかしたんだろうと、思ったり。

おか でも、それがターニングポイントということは何か感じることがあったのですか。

村田 控え室で嫌だなあと思ったことが今の作品につながって、...。それまで作っていたものは、周りの人からいいと言われるも、自分ではどこがいいのかわからなかった。でも、今の作品胸に落ちています。作品を見られることが恥ずかしいとはあまり思わなくなってきました。

おか 個展での経験があったから、オンリーワンのものを作れるようになった。そして今は、アーティストとしての自意識も芽生えてきた、ということですね。

アトリエにあるもの

おか 次に、アトリエにあるものを紹介してもらいます。みなさんが制作している場所には、何が置いてあるのでしょうか。

稲本 私はアトリエにはあまりいてなくて、いつも持ち歩いてるものとして「ノート」があります。ノートにはその時思ったこととかを書いているのですが、その時に書いておかないと消えてしまうので。

おか このトーク中もずっとメモしてるんですよ。作品のコンセプトとも通じるものがあるって、一貫していますよね。携帯電話のメモ機能とかではダメなんですか。

稲本 携帯にメモをしたりスケジュールを入れるのは不安で、それに自分の字で書いたものを残したいというのがあります。ノートの大きさも重要で、いま使っているものを気に入っていて(同銘柄を使い始めて)何代目かになります。メモが直接的に役立

ことはそんなにありませんが、読み返すと面白い
です。文字に起こすと、頭で考えているのとは違
うように進んでいきます。

おか 書くと答えが見つかる時ってありますよね。
アーティストには、毎日必ず1枚はドローイングを
するという人もいますが、それを文字でおこない
ながら、過去と現在を行き来して自分の中で整理
していつてるんですね。では、ザラさん願いま
します。

ザラ アトリエを持っていないので、アトリエにあ
るものではないのですが、私の必需品は「三脚」
です。外で撮影することが好きですし、私のスタ
イルはセルフポートレートですので、急に思いつ
いて撮ることも多く、なくてはならないものです。
自分を撮影するわけですから、三脚でカメラを固
定して撮っています。その他には、衣装で着飾る
わけでもなく、お化粧を念入りにするわけでも
なく、照明も自然光で撮影しています。

おか 日本に來られてから何か撮影されましたか。
そしてそれは、今までと違うイメージの作品に
なりそうですか。

ザラ たくさん撮りました。日本の文化や建築物、
言葉にとっても興味があったので、尼崎に來ら
れたことはすばらしい体験になっています。自分
自身の感覚や感情がいつもとは全く違うので、
ドイツの見慣れたところで撮影しているのとは
違った作品になっていると思います。

おか 楽しみですね。では助石さん、アトリエに
あるものはなんですか。

助石 ニードルです。紙にものを描く時は鉛筆を
使いますが、銅板にはニードルを使います。線
用と点用の2本のニードルを使い分けていま
す。1本50円くらいの安い粗悪品を使っている
ので、1本1本の針の出来具合が違って、同じ
ものなのですがこちらは線に向いていて、こ
れは点に向いています。高価なニードルも使
ったことはあ

るのですが、これが一番使いやすいかったので
愛用しています。

おか 中川さんお願いします。おっ、スピルバ
グ。
中川 映画「未知との遭遇」のビデオテープ
です。でも見たことはありません。

おか え、見たことがない。それがなぜアト
リエにあるんですか。

中川 アトリエのある彫刻棟にテイクフリー
のコーナーがあって、卒業生や在校生が持
ってきたいろいろなものがたくさん置いてあ
ります。これは今朝そこから拾ってきました。
彫刻の端材とか、いろいろなものが落ちて
いるところなんです。そして、置いていく
人がいれば、それを拾う人もいますとい
う。

おか 「未知との遭遇」、ぜひとも観て
ください。三枝さんはどういったものなん
でしょうか。

三枝 「はりみ」という、ほうきとちり
とりです。いつも持ち歩いている道具で、
粉がまとわりつかずに細かいものがとり
やすいので、とても気に入っています。こ
れがきっかけでほうきにはまってしま
って、家にいっぱいほうきがあります。で
も結局、持ち歩くのはこれなんですけど。

おか 村田さん、お願いします。

村田 普段、机の壁に貼っているもので
す。友人が描いた漫画と芸人さんの(イラ
ストが描かれた)メモ用紙です。

おか シャンプーハットの小出水くんが
主催している「なにわボケの会」のやつ
ね。これらをいつも見てるってこと
ですか。

村田 あまり陶芸のことを考えたく
なくて、これを見て元気をもらっていま
す。テレビのインタビューで芸人さん
の言っていたことがすごくかっこよ
くて、その言葉が制作のきっかけにな
ったこともあります。

おか 最後に、ザラさんがドイツから
來られていてということ、何か日本や
日本のアートについて

質問があれば伺いたいと思います。

ザラ みなさんの大学での様子をたくさん見させていただきましたが、私のような外国人が学ぼうとする場合、授業はすべて日本語ですか。それとも英語で授業を受けることはできるのでしょうか。

おか 大学はどこも授業は日本語ですよ。

三枝 学部はどうかわかりませんが、私のいた大学院ではゼミなどの小さい単位で授業が行われているので、留学生の多いゼミは英語だったりします。だから逆に、英語のわからない日本人学生がついていけないということが起こります。東京藝術大学では、外国語のできる日本人学生が留学生のフォローをする体制が整えられているので心配ありません。

私もザラさんに聞きたいことがあります。最近ドイツへ行っていた日本人演出家の文章を読んだのですが、ドイツでは「見られるための強い身体」が求められる、というようなことが書いてありました。先ほど、セルフポートレートに写るザラさんが厳しい表情をしている、という話がありましたが、撮られるための強い身体や、撮られることに対する強い意識、というものをモチーフとしているのでしょうか。

ザラ 私がセルフポートレートを始めた頃、さまざま不安を感じていました。セルフポートレートを撮っている時の多くは、悲しかったり、メランコリーな気分の時なのですが、撮影することで自分について振り返ることができます。それを繰り返しているうちに、だんだんと強くなれたように思います。

おか 今回ご紹介したアーティストたちは、大学を卒業したばかりで、これから自分の表現を見つけていくという旅に出ます。日本とドイツ、環境は違えども、作品に自分を投影したり、ターニングポイントを経て作風が変わったり、そうしながら制作しています。実際に話を聞いて、非常に人

間的な部分もあるんだということをおみなさんにわかっていただけだと思います。今日は長時間ありがとうございました。アーティストのおみなさんもありがとうございました。